

---

# 星降る宴

御紋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星降る宴

### 【Zマーク】

Z0474R

### 【作者名】

御紋

### 【あらすじ】

ミアさんはトンガ村の『降る星』の看板娘。

皆に愛される彼女にはこつも寝てゐるペシトのファンタぐんがいるよ。  
まあ、あれだよ。

荒唐無稽なファンタジーの片隅で日常風景喰んでる少女がいるってことなんだよ。

まとめてしまえば、『恋して』でしょう。

気ままに、またもや気分転換。

優しい物語りの書き方を練習したいなと思って書き始めました。

【不定期更新・短文更新・よろしければ『ほっかり』してください】

?

ミアさんは辺境にあるトングガ村の宿屋兼食堂兼居酒屋の「降る星亭」の看板娘です。

ミアさんは父親譲りの黒髪と、母親譲りの小麦色の肌を持つ15歳の娘さんです。

「ラクトセーん、あたし玄関掃除いってきまーす」「はいよー」

厨房でじゅわじゅわと脂を溶かしながら焼けてる肉に香辛料を散らしながら、コックのラクトさんが返事しました。

「じゃあ私は食堂のテーブル拭くわね」

「お願いします。アイリスさん」

ラクトさんの奥さんのアイリスさんが布巾片手に声をかけてきたので、素直にミアさんはお願いしました。

ざつざつかざつざか。

枯れ枝を竹の先にくくりつけた竹箒で降る星亭の玄関前を掃いてるミアさんの格好はこの村の特産品である麻生布を叩いて洗いざらして縫製したワンピースだ。

腰に巻いてるサッシュベルトは、裏山の鵬夫婦の羽毛で織った特製品。

お口様にかざすと真っ赤な色にきらめくそれはミアさんもお気に

入りの一品です。

「おはよー、ミアさん、……おつと危ない」

「あれ？ ジめん大丈夫だつた？」

「おはようヤンさん」

ぞつぞつかざかざかと掃いてた竹箒の先に振り払われる寸前だつた  
グンデルゴビートのヤンさんに御挨拶するミアさん。

うつかりと朝から被害者を出すところだつたとミアさんは自分の  
行動に焦つたようだつた。

「いやいやこちらこそ、いきなり顔を出して申し訳なかつた。

ミアさん、今日のランチはもう決まつたかね？」

ヤンさんは、地面に空いたゴビートの穴からひょこつと身体を半分  
ほど出して、ミアさんに尋ねた。

「今日のランチですか？ たしか【クラフトンの猪肉はさみ（唐味  
噌タレ付き）定食】と【鰯魚の一夜干し焼き定食】、あとは【蒸し  
蒸し野菜の4種タレ付きセット】……って、ラクトさんが言つてまし  
たよ」

もちろん、お酒はいつもどおりの別料金です。

「こりとメニューを述べた笑顔は、今日も看板娘なミアさんその  
ものだつた。

?

ミアさんは、トンガ村の【降る星亭】の看板娘だ。

彼女は【降る星亭】で小さなこころから過ごしてきた。

親代わりのコック夫婦は龍人族のラクトさんとその妻であるアイリスさん。

以前までは、片足が義足の狐人族のエフリーさんもいたんだけども今はいなくなつた。

なんでも昔馴染みに呼び出されたとかで、都に行つてしまつたとか。

ミアさんとしては大好きな家族の一員だったおやつさんがいなくなつて寂しかつたんだけど、こればかりは仕方ない。

お仕事だからね、ミアさんだってお仕事とか信用とか約束とかそういうことが大事だつてことはよく知つてるんだ。

「ラクトさん。『ンタくんの』飯つてもつ持つていきました？」

ミアさんが叫んでる。

星降る亭の『』血漫の厨房の中での、小麦の粉を炒つたり混ぜたりこねたりしてたラクトさんがその長身を起こして返事をしたよ。

「いや、まだだ」

ちょっとハスキーボイスなラクトさんの声は、奥さんであるアイリスさんが一目ぼれしたほどのいい声だ。……あれ？ もしかして一声惚れつていつたほうが正しいのかなあ？

まあ、どちらにしても降る星亭のコック夫婦が仲がいいってことは確かだから、もしかしなくとも声がいいとか力があるとか料理が

上手とかそんなことないの際ぜりでもここにいたのがもしかれないね。

なにしろ、アイリスさんはラクトさんごくべた惚れだからさ。

「準備はもう出来てるんだ。 ミトちゃん、『モンタを呼びにこつ

てきてくれるかい？」

「はーい。」解ですな

口元に飛んだ小麦粉を手首で拭いとしながら、ラクトさんはミトさんにお願いした。

赤い短い髪がトレーデマークのラクトさんの胸元には、アイリスさんが作ったエプロンが付けられている。

毎日毎日調理するときに肉の脂や魚の血なんかが飛んで服を汚してしまつワクトさんのために、アイリスさんが村の裁縫名人であるホビット族のアンネお婆さんに教えてもらいながら縫つたエプロンだ。

実は、意外にもアイリスさんに惚れこんでるラクトさんにとってとても大切な仕事道具だつたりするんだ。

「モンタくん、今日は Bieberで寝てるのかなあ」

ミトさんはちよつとだけ考えたあとで歩き出したよ。

思いついた場所があつたのかな。

ミアさんの住んでるトンガ村には、人魚が住んでる泉がある。海にも山にも繋がってるんだよって血運<sup>クモリ</sup>にいつも言つてるのは、泉の人魚たちの末の娘のエルちゃんだ。

正しい名前は『エルシー<sup>ルシード</sup>』つていうんだけじ、エルちゃんはそれじゃあ可愛いなによつて皆にエルちゃんつて呼ばせてるのさ。ミアさんは紐で結び上げた布靴で村の道をぱたぱたと駆けていたよ。

「エルー！ エル！ ポンタくん知らない？」

口元に右手を当てて、それはもう湖に響き渡るよつななめらかな声でミアさんはそう訊いたんだ。

「…………しゃ…………い…………」

ちょうど、朝日恵みを頂いた後の日向ぼっこを兄姉としていたエルちゃんが、身体を起こして返事をしたようだつたけど、残念ながらうまいこと声が出なかつたようだつたよ。

「エルー！ 聞こえないよー。もういつかい言つて……！」

ミアさんは力もあるし明るいし声もよく通る笑顔の可愛い素敵な娘さんだけど、聴力は普通の人だつたから訊き返すことにしてたようだつたよ。

ぱしゃんと水の音がしたと思ったたら、湖の中央にある人魚たちの遊び場でもある岩屋からエルちゃんが湖のなかへと潜つたようだつた。

「もう、耳遠いわね！ ミアさんは！」

「いめんね、エル」

だつて、よく聞こえなかつたんだよ。

ミアさんは申し訳なさそうに笑つていたよ。

人魚の泳ぎは速いからねえ。

いくら幼くてもさすがに人魚族なエルちゃんだ。すぐにエルちゃ

んは湖岸に立つてたミアさんのもとまで泳ぎ着いた様子だったよ。

「ゴンタくんだったりで尻尾つりしてたけど、飽きたみたいで丘のほうにこっちにやったよ。」

星見の丘のほうへ。

エルちゃんさんはいつも通り、その薄い透明な水かきのついた指で丘を指差した。

ミアさんはそれを見て頷くと、彼女にお礼を言つてから星見の丘へと歩き出したよ。

「あ、エル。ゴンタくんの今日の釣果はどうだつたー？」

思ひ出したように、ミアさんを見送つていたエルちゃんに声をかけながら。

「もちろん、今日もまる坊主ー！」

くすくすと笑いながら、エルちゃんが返事をしていたよ。

綺麗な色の貝殻のブレスレットを揺らしながら、ミアさんに手を振るエルちゃんの笑顔もやっぱり楽しそうだった。

「ふふふ。いつもどおりだね」

エルちゃんにもう一度だけ手を振つたミアさんは、ゴンタくんを探して歩き始めたよ。

「ざんねん。今日も遊んで貰えなかつたのねえ、ゴンタくん」

ふわふさの尻尾を湖岸の縁から垂らしては魚釣りをしてるゴンタくんは、いつもよくこの村で見かけるものなんだつてさ。

ただ、釣れてもすぐゴンタくんは水の中に魚たちを返しあやつんだけどね。

どうやら、つるつると魚たちにつつかれる感触が楽しいだけらしい。

「ゴンタくん、いらっしゃいねって、ミアさんやラクトさんたちにはいつも話している。

ミアさんは素敵な笑顔で、ラクトさんたちがため息付きで。

受け止め方はその人によつて違つよつだけど、トンガ村での平和な暮らしの話だからねってミアさんは笑つていたよ。

嬉しそうに笑っていたよ。

?

ミアさんが住んでるトングガ村には、なだらかな丘が一つある。

その一つが、星見の丘。

広くて村を見回せるようなその場所は、冬になるとみんな遊びの場所になる。

丘のてっぺんから転がつたら大きな雪だるまになってしまって、なほじ、ミアさんは冬の季節になるとたくさんの服を着る。寒がりなんだって。

そんなミアさんを見ると、ラクトさんはつっこみ美味しそうに贈えた猪の子供を思いで出すらしい。

一度だけ、つっこみかりとそのことを言つちやつたラクトさんは、ショックを受けたミアさんに一カ円もの聞、お喋りしてもうえなかつたそりだよ。

いつもならとつなしてくれる奥さんのアイリスさんにも、さすがにそれは許せないとちつと泣いてホローリーしてもらえなかつたようだつた。

おおおおした【降る星亭】のロックさんの姿はそれは貴重なものだったと、トンガ村の住人たちは今でも話の種にしてくるらしい。もつとも、その話を聞くとラクトさんが不機嫌になつ、ミアさんは泣きそうな表情をするので【降る星亭】でだけは云わないよつにしてるようだけどね。

さて、星見の丘に着いたミアさんのお話に戻りつか。

「パンタくん。」ほんの時間だよー？ 何処にいるのー？」

ミアさんは大きな声でペチのゴンタくんを呼んだよ。

ミアさんの声はとてもよく響いた筈だつたけど、パンタくんはす

ぐには現れてはくれなかつたようだつた。  
なにしろ、ゴンタくんは気きままだからね。

「ゴンタくん」

『なんだ』ニアさんは星見の丘をぐるぐると見回したよ。

夜になると星空が一杯に広がるその場所には、いまは白く浮かんだ蜃のお円をまだけがぽかりと見えたようだつた。

星見櫓と皆が呼んでる場所には背を向けてニアさんはゴンタくんがお蜃寝してそうな場所を探したよ。

星見の丘を囲む林の一角から聞こえた水音がニアさんは『仮になつた』ようだつた。

「ゴンタくん。ここにいるの？」

返事はなかつたようだつたけど、なんとなくニアさんはゴンタくんがいると思つたようだつた。

「ゴンタくん、みつけ！」

「……ウオン」

星見の丘の横をさうさうと流れている細い小川を、トンガ村の住人たちが『星の小川』と呼んでるんだけど、そこにゴンタくんは寝転がつていたようだつたよ。

本当は綺麗に洗つてブラッシングすると銀色に光る髪のゴンタくんの毛皮に、ニアさんは抱きついた。

「1)さんの時間はまもりなさいーー！」

「……ウオ」

ニアさんの言葉に、ゴンタくんは仕方なさうに返事して『いたよ。どうやら、決まりが悪かつたらしく』。

もふもふの今は土色に染まつてのゴンタくんの毛皮からは、さうさうと小川の石が零れ落ちたよ。

星の小川には、綺麗な星の欠片かけれいしのような細石ほそいしがあるんだ。森のことによく知つてゐる木こりのロンさんは、それは水縁石すいえんせきの欠片だねつて教えてくれたよ。

砕けた水縁石のことを、トンガ村では『星の砂』って呼んでるぢ

しー。

星の砂を水のなかに沈めておくと、水は綺麗に浄水されるんだってさ。不思議でしょ？

でも一つだけ注意点。

星の砂は寂しがりだから、たまには星の小川に戻してあげないとお水を綺麗にしなくなるんだってさ。だから、ミアさんもよく【降る星亭】の星の砂を交換にくるんだ。

たまに近所に住んでる穴狸たちの子供たちがお駄賀のお菓子田当てで星の砂を交換にきてくれることもあるけどね。

でも、食べ物を扱ってる【降る星亭】では毎日たくさんの綺麗なお水が必要だからそれだけでは間に合わないんだ。

すぐに星の砂も疲れて仲間たちを恋しがって、水を綺麗にしなくなってしまうから。

だから、ミアさんは星の小川にはよく来るよ。雨の日だけは危ないからって止められてるからいらないんだけどね。

お遣いに来る子供たちも、雨の日には小川で遊ばなこと云ってつけられてる筈だ。

「さあ、ゴンタくん。お家に帰るよー。」「ウオーンー！」

ミアさんの腰のあたりで、ゴンタくんがしつかりと呟んだよ。ゴンタくんはミアさんに首を傾げて、上に乗るかい？って訊いたみたいだったけど、ミアさんは断つたみたいだつた。  
どうやら、今日は走っていきたい気分らしい。

「今度、また乗つけてね？」ゴンタくん  
「ウオーンー！」

それでも、ミアさんだってゴンタくんの大きな毛皮につかまって

風を切つて移動するのは好きだから、次の約束だけはしっかりと取り付けたみたいだったよ。

しつかりしてるでしょ？ ミアさんも。

冬が終わつて、春がやつてきたトンガ村だけど、風が鳴いてると  
きはさすがにまだ肌が寒さを教えてくるよ。

星見の丘のてっぺんから村の真ん中にある【降る星亭】までを一  
直線に走つて降りる間に、ミアさんのほうは真つ赤に染まつたよ  
うだつた。

もちろん、寒さだけじゃなくて熱つてるのもあつたのかもしけな  
いけどね。

「ミアさん！　おはよ……！」

ゴンタくんと一緒に15歳の女の子が丘のてっぺんから駆け下り  
てくるのを見た新聞配達の途中だつた獣人族のルドルフくんはちょ  
つとびっくりしたようだつたよ。

なにしろ、真つ赤なポストに入れた御町内二コースを取り落とし  
たくらいだつたからねえ。

トンガ村は人口こそは少ないけど、それはいろんな種族の人たち  
がいるから、毎日の二コースにはことかかない。

たとえば、裏山の鵬夫婦の8羽目の雛がもう少しで孵りそうだと  
か、お祝いに御町内の婦人会では耐火レースのショールを編んでる  
とか、このまえなんかは鬼人族のグイさんのところに炒り豆が大量  
に送りつけられてきたのは一体どこの醉狂の仕業だとかそんなこと  
まで二コースになつていたね。

トンガ村の図書館長のカウタルさんの名編集で作られてる【トン  
ガ新聞】は、ときどき御町内のみんなのコラムやポエムなんかも載  
るので皆意外に楽しんでるようだつたよ。

「おつ……はよう……」

「あ……行つちやつたよ」

かすれた声でなんとか声を出したミアさんだつたけど、そのまま

ミアさんは走り去ってしまった。

ルドルフ君への挨拶のために止まる」ともできないくらいのスピードだったミアさんの横では、ゴンタくんが面白やうに笑っていたよ。

「ゴンタくんはいつも転んでもおかしくないようなミアさんにそのふさふさの毛を握られてしまっていたけど、別に痛くはないみたいだつたね。

「ゴンタくん。ゴンタくん。おいでかないで~」

ミアさんは思つたよりも勢いがついてしまった自分の足がどうとか無事にスピードを落としてくれないものかと祈つてくるようだつた。

頼みの綱は、一生懸命に握りしめていたゴンタくんの毛束だけ。いくらミアさんだつて転ぶのは怖い。ましてや惰性の法則は異世界にだつて当然生きてるのだから、痛さはどれほどものかと考えるとそれだけで恐怖だとも。

ぱたぱたぱたと、小さな砂ぼこりがミアたちの走り抜けたあとには舞っていたけど、なにしろ時刻は早朝だからそのくらいのことは誰の迷惑にもなりはしなかつた。

…可愛いものでしょ？

? (福井県)

IJのよいつなとじもにIJNへ、あなた方の心がほつとしますよい。^  
^。 。。

?

「あう、あう、あの、あのね。ゴンタくん」

ゴンタくんゴンタくん。

まだ走っていたミアさんは、つかまつたままの彼女の友達の名前を何度も何度も呼んでいたよ。

「どうしようゴンタくん。もひすぐで「お家」なのに、止まれる気がしないよ～～」

ふえええええええ。

「……オン！」

泣きそうな顔で呟いたミアさんの言葉に、なぜかゴンタくんは元気よく返事したよ。

「……ッ馬鹿ああああ。ずっと走ってなんかいられないに決まってるじゃないかああああ」

「ゴンタくんのバカああああ。ミアさんは悔しそうだったよ。

どうやら、ゴンタくんはまだまだ走り足りなかつたようだねえ。朝、はんもまだだといつのに元気なことだ。

流石は、白狼族の一員とこうだけのことはあるのかな。

「オンオンー！」

2回ばかり元気に叫んだゴンタくんは、そのふさふさの毛で小さな風を捕まえながら、おんじょつと捕まつてこるミアさん」と行き先を決めたのさ。

右に曲がって、左に3回。

突進すれば、トンガ村のど真ん中だ。

真ん中に立つてゐるトンガ村の村長の手作りの彫像が「よつこ」そ、トンガ村へ」つて挨拶してくれてゐる。もちろん、その後ろには村で一番大きな井戸が掘られてゐるよ。

その井戸には、村の西南にある人魚の泉に流れている水とはまた別のものが流れていゐるのさ。

「うわああ、月水影の色が変わつてゐるひひひひひ……」

いけない、もうこんな時間だ！

「オンオン！」

ミアさん的眼には、きっと井戸から漏れる月水の輝きが見えたんだろうね。月水井戸の光は時刻によつては色や輝き方が異なるから、時間を計るにはいひつて云われてゐんだよ。

月水は月の輝きを宿した水。

古代の月の光が融けたものだと言われてゐるよ。

お酒作りがお仕事のワントさんは、その月水を使って大切な落花酒を作るんだよ。

四季の花を月水に浸けて発酵させた落花酒はトンガ村ではお祝いのときの大重要なお酒になつてゐる。夜闇の中でも発光する色とりどりのお酒なんて最高じゃ ないか。

「つて、そのまえにどうすればいいの……」

このままだとお家に突っ込んじゃうよ……

「……オン！」

なんてミアさんが叫んだ瞬間に、ゴンタくんが急停止したんだな、これが。

「……ゴンタ、くんつ……！」

それは真つ青の顔をしたミアさんが、そんなゴンタくんに「なんで？」つて言いたそうな表情で振り向いたようだつたよ。

もちろんそんなミアさんの足元は既に滑つていたから、ミアさんの視線は低い場所からのものだつたよ。

それはもう怖かつたんだらうねえ。

「……」

「…………ありがとう、『ゴンタくん

真っ青な顔で、ゴンタくんにお礼を言った『ミアさん』の心臓はやつや  
あざと激しく動いてたよ。

「…………オン

滑りかけてた『ミアさん』の身体の下敷きになつた、ゴンタくんは「仕  
方ないなあ」とでもいうかのように舌を出して笑っていたようだっ  
たよ。

表情豊かな白狼族つていたんだねえ。

まあ、『ゴンタくん』だからねつて、『ミアさん』だったら笑つて終わら  
せるんだろうけど。

?

「ただいま、ラクトさん、アイリスさん」

「うおん」

『閉』<sup>クローズ</sup>の札がかかっている扉を開くと、掃除も終わって綺麗になつた【降る星亭】のなかで今日のメニューを書いてるアイリスさんが厨房の片づけをしているラクトさんが待つていたよ。

「おかえりなさい」

「…おかえり」

笑顔で返事したのはアイリスさんだし、言葉少なく返事したのはラクトさんさ。

ラクトさんはあいかわらず口が重いねえ。

アイリスさんはまだ少し本日のメニュー表の出来上がりに納得いつてなかつたようだつたけど、幸い開店時刻にはまだ少し時刻があつたから後にすることにしたよつたよ。

「さ、ミアさんも一緒に手拭いて朝ごはんにするわよ」「はーい」

飲食を商う【星降る亭】だから、清潔はとても大切だ。  
砂だらけのゴンタ君を見て、調理を終えたラクトさんが沈黙しながら眉間の皺を寄せていたよ。

ただでさえ泣く子も黙ると言われる強面のラクトさんだから、それはもう怖いってもんじやないさ。

ただし、このトンガ村では誰もラクトさんが怖いなんて言つ奴はないけどもねえ。

なにしろ、蓋を開ければラクトさんがただの料理好きの愛妻家の娘大好きな名料理人だということはもうトンガ村の皆さんには判つ

てしまつていいんだから。

た・だ・し。　　その最初の蓋を開けるまでの間は怖がられるのも本当ではあるんだけどもね。

「さて、『ゴンタさんはご飯の前にブラッシングです。』や、お外へ出でくださいな！」

「…ウオン」

掃除道具を片づけたばかりのアイリスさんがなんだか怖い氣のする笑顔で「ゴンタくんに命令したよ。笑顔が怖いのは、彼女がお店のお掃除担当責任者でもあるからさ。

朝のお掃除を終えたばかりの店内に新しい塵を持ちこまれたらたまたものじやないからねえ。

片づけた簞と塵取りの代わりに、アイリスさんは「ゴンタ君専用のブラッシング用のブラシを手に取つた。

「ミアさんは先にご飯を食べちゃうこと！」

ラクトさんがせっかく作つてくれたんだからね、あつたかいうちに食べなさい。

「ええええ？　そんな寂しこよ、アイリスさああん

朝ごはんくらいは畠でご飯食べたいです！

アイリスさんの命令はどうやらゴンタくんだけにではなく、ミアさんにも下されたようだつたけど、ミアさんとしてはそれはちよつとあんまりな命令だつたようだ。

なにしろ、この【星降る亭】はトンガ村唯一のお食事処であると同時に居酒屋であり、宿屋である。

今の時期、トンガ村にはお密さんは来ていないので朝ごはんはゆっくり食べれるが、昼と夜ごはんはそつはいかない。遅めの昼ごはんはたいていはミアさん、アイリスさんの順番で一人ずつ取つているし、夜も忙しく交互に食べるのがようやくだ。

ちなみにラクトさんは厨房が空いてるすきを見て、つまんたり食べたりしてゐるようだ。　　おつかれさま。

まあ、そんなわけでなかなか皆でゆつくつごはんを食べるなんて

「言つのは、ミアさんが【星降る亭】を手配ひつけなつてからじやなかなか出来なくなつちやつてね。

だから、ミアさんちでは朝じさんは家族と一緒にひととこりのがみんなのお約束になつてゐる。  
まだまだお密さんも来てない時間にのんびり家族でお喋りしながら楽しもつよと言つたのはミアさんだったのかアイリスさんだったのか。

ラクトさんは賛成した人であつたことは確実だけだ。  
なにしろラクトさんは照れ屋さんだからね、なかなか彼には言えない内容のお約束であることは確実だもの。

そんな仲良しな【星降る亭】だけど。

今日の朝じさんは、なぜか朝の散歩を遠出していたゴンタくんの隠まぐれのおかげでミアさんだけが遅れてしまつたよつだよ。  
食事は美味しいりますこと。

これは【星降る亭】における最大原則。  
だから、素直に朝じさんはをすませておいたアイリスさんとラクトさんに罪はないのや。

「ふえええええ。」ゴンタくんのバカあああああ

… ウオーン！

すでに今朝から何度田か判らなゴンタ君へのミアさんのベセは  
お外に出でたゴンタくんにも聽こえたようだつたよ。  
反省してゐのかは怪しこと想つただけどもね。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0474r/>

---

星降る宴

2011年7月1日03時15分発行